論文要旨

# 宗教集団の運営に関する宗教社会学的研究
## ―武州御嶽山を事例として―

大正大学大学院文学研究科
宗教学専攻　博士後期課程　髙田　彩

本研究は、宗教集団の運営と宗教者や信者の宗教活動を、陰で支えている、いわば裏方と呼ばれるような人々に光を当て、その人々がこれまで行ってきた働きの実態と、果たしてきた役割を、歴史的変遷をも含めて明らかにすることを目指している。

これまでの宗教学の研究においては、教化や布教を行う宗教者と、宗教者の教化、布教を受容する信者の構図が固定的に描かれる傾向あり、また、特定の教団や教派という集団や組織を扱う研究においても、関心の中心は、教団の教義、実践および儀礼など、宗教活動に関係するものであったといえる。そのような問題関心から、宗教集団の分類、類型化を行う研究も提出されているが、宗教集団の運営を、実態に即した形で理解しようという試みはあまりみられない。

つまり、これまでの宗教学では、宗教者と信者、および彼らが行う活動という表の部分、聖的な部分しか研究の対象として扱ってこなかった。しかし、宗教集団やその活動は、宗教活動以外の実務によっても成立しており、その世俗的な仕事を引き受けることで、宗教集団を裏側から支えている人々が存在する。一方で、従来の宗教学では、そのような事実には目を向けず、宗教集団を裏側から支えている人々を宗教学の研究対象から外してきた。

そのため、本研究では、東京都青梅市に位置する武州御嶽山を事例とし、武州御嶽山の宿坊で働く人々、その中でも特に、宿坊運営の要となって働く御師の妻に焦点を当て、彼女たちの労働実態と、山内における彼女たちの存在意義を論じた。同時に、御師の妻が担当する仕事内容の変遷や、期待される役割の変化に注目することで、近現代における山岳宗教をめぐる社会状況の移り変わりについても検討を行った。

第１章では、本研究のフィールドである武州御嶽山が、どのような組織によって運営されているのか概観した。その際、武州御嶽山の山上集落を運営するための組織と、武蔵御嶽神社を運営するための組織の二つに区分して概要を記した。そして、武州御嶽山は、武蔵御嶽神社を運営するための組織と、山上集落を運営するための組織による二重構造によって運営されていることを示した。

第２章では、御師個人が、自身の家や宿坊のために行う仕事とその内容について確認した。同時に、現存する宿坊の一覧を提示した上で、宿坊の経営形態を、①講員とそれ以外の一般客、両方を泊める、②講員は泊めるが一般客は泊めない、③太々神楽講中の受け入れ、講社の代参などを迎え入れるが宿泊はなし、④宿坊が休眠状態の四つに分類した。この四つの分類と関連して、御師の仕事内容も変化することを指摘した。

また、第２章では、現在における御師の活動内容を、代参や太々神楽の受け入れ、講社廻り（配札活動）など、宗教に関わる側面と、それ以外の畑仕事や山仕事などの御師家の生活に関わる側面の二つの視点から報告した。

第３章では、明治末期から昭和初期における武州御嶽山が、どのように運営されていたか、観光という側面に焦点を当てて論じた。まず、江戸時代に作成された紀行文、案内記である『御嶽菅笠』と『御嶽山一石山紀行』に記載されている内容と、明治時代、大正時代に神社や御師が発行した『武州御嶽山』

と『武蔵御嶽山案内』に記載されている内容を比較し、明治、大正時代に入ってからの御嶽山は、山外に御嶽山の魅力をどのようにアピールしようとしていたのか分析した。

その結果、御嶽山を「内地人」の避暑地として宣伝し、講中の参籠、参詣のための宿泊施設だった宿坊で、勉強目的の官吏、学生や修学旅行のための利用者を受け入れていたことが明らかになった。さらに、大正時代から昭和初期にかけて、鉄道網が整備されたことにより、御嶽山は都市近郊の行楽地として注目され、御師との師檀関係を持たない一見の客（行楽目的の参詣者）の増加が見られるようになっていく。そして、この行楽目的の参詣者への対応を行うようになった御師の中には、夏期に行っていた講社廻りを辞める者も現れた。つまり、御師との師檀関係を持たない行楽目的の参詣者の存在によって、御師の宗教活動の内容が変化していた。

その後、春の代参シーズンが終わった夏期の宿坊を、「オゾンの家」として開放する取り組みも行われ、御嶽山は避暑地、学習地としてますます注目されていくこととなる。このように、明治末期から昭和戦前期にかけて、御嶽山では御師との師檀関係を持たない行楽目的の参詣者へ向けて、広く神社や宿坊を開放する動きがあった。上述の取り組みによって、御嶽山には観光地としての側面を整えていったと考えられる。

第4章では、第3章に引き続き、昭和戦後期から平成初期における武州御嶽山が、どのように運営されていたか、観光という側面に焦点を当てて論じた。従来の研究において、御嶽山の観光化について論じる際には、昭和20年代が観光化の画期であったと論じる傾向が強かった。昭和25（1950）年には、武州御嶽山周辺一帯が秩父多摩国立公園に指定され、昭和26（1951）年には、御岳登山鉄道（ケーブルカー）の営業が再開した。また同年には、宿坊の機能と並存して、旅館や国民宿舎が開業する御師が現れる。加えて、昭和27（1952）年には、神社が単立化し、武蔵御嶽神社に社名が改められた。

このように昭和20年代の御嶽山には、大きな動きが見られたため、先行研究では、昭和20年代が、御嶽山の観光化の転換期であると考えられてきた［西海1979、1983］［東京都教育委員会1986］。

続いて、昭和30年代に入ると、青梅線の行楽路線の拡張や、御岳登山鉄道による旅客の誘致活動がはじまり、また、宿坊では、林間学校や研修会、合宿などの団体客を受け入れるようになっていく。昭和40～50年代にも、そのような団体客の受け入れが引き続き行われていたが、一方で、この時期には、講社の参詣も盛んに行われていた。このことから、先行研究で論じられていた観光化への転換は、昭和20年代に突然起こったものではないと考えられる。

第3章で論じた明治末期から昭和戦前期にかけても宿坊の一般開放という画期があり、第4章で論じた昭和戦後期から平成初期にかけても、鉄道会社による行楽路線の拡大と旅客誘致、加えて林間学校などの受け入れという画期が見られた。

したがって、御嶽山はある時期を境に「観光化」するのではなく、時代ごとに、流行を取り入れた運営を行っており、その戦略の一つに観光という要素があると理解するのが妥当である。

第5章では、第3、4章と同様に、平成中期から後期における武州御嶽山が、どのように運営されていたか、観光という側面に焦点を当てて論じた。平成初期の御嶽山では、講員の高齢化と後継者不足による講社の減少と、それに起因する山内経済の低迷が問題となっていた。加えて、他の施設に代替され、御嶽山の宿坊で林間学校を行う小・中学校もほとんどなくなった。

このような問題に直面した御嶽山では、御嶽神社を「開かれた神社」として宣伝し、滝行体験や文化講座を実施したり、従来講社以外には公開されていなかった太々神楽を一般公開したりすることで、これまで御嶽山のことを知らなかった人々に、その魅力を伝えることを試みた。しかし、山内の状況は改善されず、平成20（2008）年には、ケーブルカーの年間乗車人員数が43万6000人まで減少し、戦後

最低の乗車人員数を記録した。この時期の御嶽山は、新規の参詣者を増やすために様々な活動に取り組んだが、参詣者は増加しなかった。言い換えると、この時期の御嶽山は、宗教集団としての運営方針が定まっていない時期であったともいえよう。

平成に入ってからの山内経済の低迷を打破するため、御嶽山では平成23（2011）～24（2012）年にかけて、「おいぬさま」活性化事業に着手する。本事業は、大口真神（おいぬさま）を祭神の一つとする武蔵御嶽神社を、ペットの犬同伴で参詣できる神社として宣伝し、ペットの犬同伴の参詣者を呼び込むことを目的として、御嶽山の御師を中心に推進された。また、第5章では、本事業を、ペット同伴で参詣できる神社というイメージ戦略によって、新しい信者を獲得することを試みる活動と位置付けた。

第5章では、第3～4章で論じてきた山内運営と観光の状況を通史的に分析した。その際、御嶽山を訪れる人々の側に立って整理を行った。現在、御嶽山を訪れる人々は大きく三つに分けることが可能である。①講員、②リピーター、③一見の客である。①は、従来から御師との間に世襲的、固定的な師檀関係を結んでおり、年に一度、御嶽山に代参に訪れる人々である。講社講員は毎年継続的に御嶽山に訪れるため、御嶽山にとっては安定した経済基盤になっていた。

次に②は、個人的な関心で御嶽山を訪れて、気に入って何度も足を運ぶようになった人々である。彼らは、講社講員のように毎年決まった時期に決まった御師や宿坊に世話になることは少ないが、御嶽山の自然や文化に魅力を感じている場合が多い。この層に属するのが、第5章で扱った事例のペット同伴の参詣者と、第4章で扱った昭和戦後期の林間学校の小・中学生などである。林間学校や研修は、毎年訪れる人々の内容は変わるが、御嶽山の住民と継続的な関係を結んでいることから、リピーターに分類した。

①と②は、関係性の継続という点では共通するが、講社は代々世襲されてきた御師にとっての家産であり、御師の持つ資本と考えられるため、代替がきかない存在である。一方、リピーターは、御嶽山の持つ自然や歴史、文化などの資源に魅力を感じているため、気に入ったら何度も御嶽山に足を運ぶ可能性があるが、より魅力的な資源を持つ場所が現れた場合、そちらに乗り換える可能性がある流動層ともいえる。そのため、御嶽山では、このリピーターを絶えず増やす努力が必要であった。

最後に、③は、数ある候補の中から、アクセスの利便性や、設備の良さなどの条件を満たす観光地に訪れる人々である。また、一見の客にとっては、もてなしや食事などサービスの良し悪しが非常に重要であり、満足したサービスを受けられた場合は、リピーターとなる可能性もあった。

上記の三者は、講社講員、リピーター、一見の客の順で経済基盤としての安定度が高いといえよう。御嶽山は、リピーターを増やすために、時代ごとに様々な魅力を作り出し、提供する活動を継続して行ってきた。そのため、第5章では、おいぬさま活性化事業を、御嶽山を継続的に訪れるリピーターを増やすための活動の一環と位置づけた。

第3～5章では、明治末期から平成20年代までの御嶽山の歴史的変遷を観光という視点から追ってきた。また、第3～5章においては、御嶽山に訪れる人々の性質の変化についても指摘した。第6章では、目線を転じて、第3～5章で扱った講社や行楽目的の参詣者を迎え入れる宿坊とそこで働く人々に注目し、御嶽山の宿坊で働く人々がどのような仕事をしているのか、またその仕事内容がどのように変化しているのかを明らかにするため、まず山麓地域から宿坊に働きに来ていた人々、特に宿坊運営に携わる女性たちの役割について検討した。

御嶽山では、昭和30年代まで宿坊で働いていた女性たちのことを「お手伝いさん」、それ以降に宿坊で働いていた女性たちのことを「アルバイト」と呼んでいた。お手伝いさんは、10代後半から20代前半の山麓地域出身の女性で、3～5月の春の代参シーズンに住み込みで働く季節労働者の性格を持ってい

た。

お手伝いさんと呼ばれる女性たちは、御嶽山の宿坊で調理や配膳などの仕事を担ったが、そのような仕事を通して、彼女たちは、家事の技能や行儀作法を身につけた。そのため、お手伝いさんたちにとって、御嶽山の宿坊での労働は、嫁入り前の行儀見習いとして位置付けられていた。

一方、昭和 40 年代頃からは、宿坊で働く女性たちのことを「アルバイト」と呼ぶようになった。このアルバイトの女性たちは、御師の子どもと同級生、御師家と親戚などの、御師家となんらかの繋がりを有する、山麓地域在住の高校生であった。彼女たちは、高校の夏期休暇や土日を利用して、数日から十数日間宿坊に泊まり、調理や配膳、清掃、接客などの仕事を担当した。アルバイトの女性たちは、御嶽山の宿坊を、友達と一緒に働きながら社会勉強をしたり、小遣いを稼いだりする場所として認識していた。また、その労働形態も、住み込みの季節労働から、御師家の労働力だけでは手が足りないときに泊まり込みで働く、単発、短期労働へと変化した。

このように昭和 30～40 年代にかけて、宿坊で働く女性たちの労働の動機や意義が変わっていった。第 4 章で論じたように、昭和 30～40 年代の御嶽山は、交通網の発達や、林間学校、研修会などの団体客の増加などがみられ、宿坊稼働が長期化するようになった時期でもあった。

また、同時期の日本社会の状況として、全国的な高校進学率の上昇や、高度経済成長に伴うライフスタイルや価値観の変容があり、山麓地域においても、交通網の発達と通勤圏、通学圏の拡大、青梅市の工業化など、様々な要因によって、山麓住民の就労先、進学先の選択肢が増加していた。それによって、彼女たちは、より良い労働環境で安定的な賃金を得られる職場を選択することが可能になった。加えて、従来御嶽山でしか体験できなかった事柄が、アルバイト時代になると他の進学先、就労先で代替可能になっていく。以上の複合的な要因によって、宿坊で働いていた女性たちはお手伝いさんから、アルバイトへと性質が変わっていった。

第 7 章では、第 6 章での問題意識を引き継ぎ、講社や行楽目的の参詣者を迎え入れる宿坊とそこで働く人々、特に御師の妻の役割に注目して検討を行った。その結果、御師の妻は、昭和 30 年代まで「奥様」と呼ばれており、御師家や宿坊のために働く従業員に、状況を見て指示を出し、指示通りに仕事をさせる管理、監督者の役割を担っていたことが明らかになった。一方、講社に対しては「御師の奥さん」としての振る舞いが求められていた。

しかし、昭和 40 年代に入ると、御師の妻は「おかみ」と呼ばれるようになっていく。この名称の変化を境に、御師の妻の役割も転換していくこととなる。おかみと呼ばれるようになってからの御師の妻は、料理や掃除、接客など、おおよそ宿坊運営についての全ての実務に関わり、自らが率先して作業を行う宿坊運営の統括者の役割を担うようになっていった。そして、おかみは、奥様が担っていた感情労働を含む頭脳労働に加えて、肉体労働をも担当するようになったといえる。

また、第 7 章では、御師の妻に肉体労働が付加されるようになった要因として、第 3～4 章で明らかにした御嶽山の運営と観光事業に関する取り組みと、第 6 章で明らかにした宿坊で働いていた山麓地域の女性たちの役割変化が関係していることを指摘した。

第 6 章では、お手伝いさんと呼ばれる住み込みの季節労働者が、昭和 30 年代前半頃まで存在しており、そのような働き手が、昭和 40 年代以降はアルバイトと呼ばれる女性たちに移り変わっていったことを指摘した。すなわち、御師の妻が奥様と呼ばれていた時期と、板前やお手伝いさんがいた時期は重複しており、御師の妻が「奥様」と呼ばれていた時期に存在していたお手伝いさんがいなくなったことで、これまで彼女らが行っていた料理、掃除などの仕事を御師の妻が担うようになっていた。

加えて、講社を受け入れる宿坊の機能と、林間学校などの講社以外の行楽目的の参詣者を受け入れる

旅館、民宿の機能を併せ持つことによる宿坊運営上の業務の多様化が、御師の妻の役割をマルチタスク化させていく要因ともなった。また、昭和 40 年代から、宿坊経営体を支えていた住み込みの従業員の代わりに、単発のアルバイトが入りはじめる。林間学校や研修会の受け入れと従業員の性格変化によって、従来「奥様」でいられた御師の妻は、宿坊運営を統括する「おかみ」へ求められる役割も変化していった。

第 7 章では、宿坊における御師の妻の役割と位置付けについて明らかにしたが、第 8 章では、宿坊における御師の妻という個人が、誰から、どのような教育を受けて、宿坊や御嶽山という宗教集団を維持するために必要な仕事を覚えていくのかについて考察した。その際、御嶽山における御師の妻のライフコースを提示し、彼女たちは各段階において、どのような役割を期待されているのか、段階ごとの呼称の変化から分析を行った。

まず、嫁いできたばかりで、山内の慣習や宿坊運営についての知識や技能が乏しい状態の「若嫁」、次に、山内の慣習や宿坊運営の業務に関する知識や技能を身につけて、山内において中心的な役割を果たす「なかばあさん」、そして、宿坊運営に関して責任を負う立場を降り、山内組織の活動にも参加の義務がなくなった状態の「おばあさん」の三つである。この中でも特に、「なかばあさん」と呼ばれる段階が重要であることを示した。

このようなライフコースに照らし合わせて、御師の妻が関与する三つの社会組織である婦人部、組合、付き合いにおいて果たす役割に注目することで、社会組織における御師の妻の活動実態が、山内でどのように評価されているのか検討することを通して、御嶽山にとっての御師の妻の役割と位置付けを明らかにした。

その結果、御師の妻は、家同士の互助に重点を置く組織である組合、付き合いにおいて山内慣習などの教育を受けたあとに、神社との関係性を重視する組織である婦人部に入り、自身の宿坊や、山内の女性組織を引っ張っていく役割を果たす「なかばあさん」になっていくことが判明した。このような過程を経て、御師の妻たちは、御嶽山という一山組織の運営を担う場面でも力を発揮していくこととなる。彼女たちは、宗教儀礼の執行などで直接的に神社運営に関わることはないが、神社の清掃や行事への参加を通して神社と繋がっているといえる。

本論文では一貫して、宗教集団の運営がどのような人々によって、いかにして行われているのかを論じてきた。宗教集団の運営は、大きく二つに分けられる。宗教活動をつかさどる部分と、それ以外の実務を担う部分である。宗教活動をつかさどる部分では、宗教者の布教教化や儀礼の執行、それらの宗教活動を受容する信者という二つのアクターが登場する。

本研究では、武州御嶽山を事例として、宗教集団を運営するために必要な実務に携わる人々の具体的な仕事内容と、その働きが集団内でどのように位置付けられるのか検討を行った。この実務の部分には、宗教者と信者のみならず多様な人々が関わっている。本研究においては、宗教集団の運営に関わる多様な存在として、御師の家族、特に御師の妻や、山麓地域から御嶽山に働きに来ている人々を取り上げ、各々の具体的な労働の実態と山内における役割について、歴史的変遷を踏まえて明らかにした。

武州御嶽山という宗教集団における実務とは、一山を構成する最小単位の御師家が経営する宿坊において、様々な目的を持つ参詣者を迎え入れるために必要な業務を行うこと、また、山内に居住する御師家の生活が成り立つように、環境を整え維持することであった。

このように、宿坊を機能させるためには、多様なアクターの働きが必要不可欠であった。例えば、本論文で紹介した、男衆、板前、お手伝いさん、アルバイトなどの山麓地域の人々の労働力は必須であり、さらに、山麓からの働き手を管理、教育する役割を果たす御師の妻は、御嶽山の宿坊において扇の要と

しての役割を果たしていた。つまり、宗教集団は、宗教者と信者のみで成立しているのではなく、その他のアクターを含めて成り立っている。

現在、宗教集団の運営は、発展を目指すのではなく、現状をいかに維持し存続していくのかという問題に直面している。宗教集団をめぐる現状を反映する形で、今後の宗教学の研究においては、「維持」という視点が必要になるだろう。

本研究で論じた宗教者と信者以外のアクターである、宗教者の家族、特に妻は、宗教集団の維持に関して大きな力を発揮している。現代の宗教のあり方を鑑みると、これからの宗教集団の運営に関して、ますます宗教者の妻の担う役割が増大し、宗教集団内での彼女たちの重要性が強調される場面が増えていくと考えられる。